月の嚆矢の飛ぶ先は

雨和七瀬

獣の足音に目を覚ます。昼でありながら、この森は月が煌々と葉を、水面を、そして僕達を照らしていた。木の洞から外を見る。遠くに、豆粒ほどの赤い毛が枝葉の隙間からちらついた。

――ああ、また来たのか。懲りない奴だ。

こんな事には慣れたもので、奥に立てかけていた弓を取り出すと矢を持たずに適当に弦を引く。それを合図として、辺りに漂っていた魔力が手元に集まり、一本の黄金の矢となる。パッと手を離すと、生み出された矢は弦の戻るよりも速く森の上空を切り裂いた。

轟音。地に落ちた矢が雷を放つ。一定の速度で見え隠れを繰り返していた紅は後退したかと思えば立ち止まった。そのまま帰ってくれれば良かったものを、客人は右に曲がって進み続けた。僕はもう一度弓を引き絞り、また雷を束ねて飛ばす。また雷鳴が轟き、地面に雷撃の跡が残る。

『――次は当てる。命が惜しければ去れ』

風に乗せて忠告をする。動揺させることはできたものの、無駄に胆力があるのか退く気配もない。うざったくて仕方がない。動かない的にならカンタンに当てられる。また同じように弦を引き、狙いを定める。精霊の森に迷う者を追い払い、暴く者を悉く滅するのが僕の役目。

「注意はしたんだ、悪く思わないでよ」

手を離す。雷の矢は目にも留まらぬ速さで一直線に飛んでいく。気分の良くない仕事も終わり、そう思って僕は弓を置いた。しかし、地面スレスレで黄金の光は向きを変え、空中で解けていった。

驚いて狙ったはずの場所を覗き込むと、獣人は魔力を帯びた輝く盾を構えていた。時折こちらを覗き見ている。矢の飛んでくる方向から発射地点を割り出したみたいだ。

「アイツ……小細工で僕に挑むつもり？」

なら、小手先でどうにかなる相手ではないと叩き込んでやろう。

「絨毯、散歩でもしようか」

木の洞の奥に声を掛けながら飛び降りると、丸まっていた絨毯が飛び出して僕の身体を受け止めた。僕は空を舞う絨毯の上で片膝をつくと、威嚇射撃のつもりで足元を狙う。風の魔力を集めて放つと、螺旋状の風が音を立てながら獣人に襲い掛かる。獣人は音に反応し、わざわざ着弾点で盾を構えるが、その盾が風を拾い、獣人をよろけさせる。持ち直した獣人が空を見上げ、僕たちを凝視する。

「あはは、動かなきゃ当たらないのに」

絨毯に動き回ってもらいながら、次は当てるつもりで光を束ねる。構えているだけでも熱い強烈な光を金属の盾で受け止めたら、そう思うと思わずニヤけてくる。熱に耐えきれなくなって光の矢を放つ。すぐに到達し、その一部は鏡に反射されてあちこちへ飛んでいく。しかし光が途切れる頃にまた獣人の様子を窺うと、彼は片手ずつ交互に盾を持ち直していた。

「頑張るね。次の矢は片手で受け止めきれるかな……ッ」

思い切り弓を引く。今までより長く、入念に、雷を折り重ねる。獣人は僕が弓を構えていることに気が付き、鏡の盾を真正面に向けてきた。

「跳ね返そうって言うの？　ならこれはどうよ！」

僕が合図を送ると呼応するように雷は形を変える。そのまま手を離すと雷は放射状に飛び出し、一つが盾に弾かれるものの、周囲に雷が落ち、獣人の毛を逆立てていく。直撃こそしていないが、毛先が焦げたのか香ばしい香りが漂う。

「小童め、小細工を……」

獣人が唸り声を上げる。コイツ、この弓術を何年鍛錬して来たと思ってるんだ。鎧まで着ている癖に、見た目でしか判断できないガキンチョはこれから困る。せっかくなら煽ってやろうと思って、絨毯を小突いて下に降りて行った。近づいてみると、炎のように赤い毛が静電気で揺らめいていると本当に燃え盛っているような様相であった。獣人は盾を構えながらこちらを睨みつけている。

「……なぜ俺を攻撃する」

よく考えてみたら、この獣人は攻撃に関しては己の爪のみでここまでやってきたようで、手には盾のみを携えていた。お前みたいなのを追い払うのが役目、といえば逆効果か。

「……家に勝手に入ってきたら追い払うでしょ」

すると獣人は盾を降ろし、僕が弓を絨毯に置くと獣人も盾を地面に置いた。その場で獣人は僕へ問いを投げかける。

「家……もしかしてお前が『ハナレ』か」

ハナレ……ああ、嫌なことを思い出した。

「僕は元からこの森に住んでる。捨て子、迷い子……そういったものとは訳が違う」

獣人は僕の言葉に猜疑の目を返す。

「……ハナレとは、精霊に連れ去られた子どもだと聞いたが、違うのか」

ああ、人里ではそう解釈してるんだ。それで諦めることに妥当な理由を付けて、彼らを……。

「これだから人間は。子供を探しに来たならここにはもう居ない。大人しく帰れ」

「……じゃあお前は何なんだ」

精霊、人間。子供、大人。生者、死者。……僕は、何なんだろう。不快な疑問だ。それを何気ない顔で聞いてくる。
「……帰れ」
僕が再び弓を手に取ると、獣人はすぐに後ろを向き、
「分かった、帰る」と告げた。
「待って。何でここに来たのか、それだけ教えて」
獣人は立ち止まったまま、静かに答えた。
「……息子を探しに来た」
ハナレを探している理由が分かったことで、思わずため息を吐いてしまう。本当のことを言ってしまった方が良いか、それとも。
「この森に居ないなら、もう無事を祈るしかない。邪魔したな、チビ助」
別れの挨拶と言わんばかりに、獣人は手を振って歩き始める。そして。
『『不滅』の加護があらんことを」
そんなことを宣った。
――お前もか。
音を立てないように、静かに、矢を手に取り番える。大丈夫、あの足取り、奴は振り返らない。狙うべきはどこだ。やはり喉、鬣が邪魔、脳天……ああ、体の造りが違うとどこを狙うか悩んで、矢の先が定まらない。だから。

早く、消えろ。

血溜まりが風に押されながら広がっていく。直立歩行を止めてしまえば、この毛むくじゃらが人だったかどうかなんて分からなくなってしまう。
『『不滅』の加護なんて、どこにも無い、でしょ」
喉の奥が手を伸ばす苦痛。内側から膨れ上がるようで、押されて目頭が濡れて冷めていく。冷めるのは、拭う『風』が吹くから。
『また一人、旧き習わしに縛られる迷い子を還したか』
形なき『王』が頬を、頭を撫でる。それから逃げるように一歩。パシャリと赤い波紋が広がる。
『それにしても、弓の腕を落としたか？　随分と体がぶれていた。見ていられなかったぞ』
俯いたまま固まる。口から水分が引いていく。ねっとりとした唾を、無理やり押し込んでから口を開く。
「……足りないんだ、『僕』が」
元の日々に戻って、前と同じことをやろうとすると、欠けているのが鏡ではなく自分であることに気が付く。そして、幻肢痛のように『欠片』の夢を見る。移ろいゆく生と穏やかな死、ここには無いものばかりを。

『ふむ。何度も言うが、お前をもう一度外に出して、これ以上損なう訳にはいかない。欠片を探しに行くのは臣民達に任せればよいではないか』
　それを待って、何年経ったと思ってんだ。更に一歩。ぐちゃり、と引き裂かれた肉塊の柔らかさが靴の裏越しでも伝わってくる。
『こら、亡骸を踏んではいけない。哀れな夢想者であっても我々と同じ、人だ。敬意をもって接さねばならない』
「……自分で八つ裂きにしといて、よく言うよ」
　手をひらつかせて絨毯を呼ぶ。飛んでくる音に合わせて跳び上がると、ちょうど絨毯がボクを包んで舞い上がった。
『待ちなさい、ク……』
「その名前で呼ぶな、ヴェイル！」
　この期に及んで、精霊に仕立て上げておいて、今更。嫌いだ。嫌いだ、どいつもこいつも！
　怒りに任せて絨毯の端を千切らんばかりに引っ張ると、絨毯はとにかく上へ、上へと惑うように飛び上がっていく。
『すま……、危……くれ！　ル……ォール！』
　森に融けた『父』は、所詮地に縛られている亡霊に過ぎない。声も、情けないほどに小さくなっていく。

　雲を突き抜けた先。昼の蒼と夜の藍、その境界が見える場所まで来た。西を見れば陽の下で竜が空を駆け、東を見れば煤を纏った煙と雨雲が鬩ぎ合う。
「……自由になりたいと思わない？」
　ゆっくりと絨毯が開いていく。僕を落とさないようにしっかり包んでくれたせいで、靴の汚れが移ってしまっていた。
「僕の言っていいことじゃないね、ごめん」
　絨毯は静かに夜空の端をなぞる。それが絨毯の答えだ。その気持ちは、簡単に推し量れるものじゃない。
　僕が王の器じゃなければ。絨毯が僕を庇って逃げていなければ。僕達を照らす月明かりがそんなあり得ない世界を、染み入るように夢想させる。
「……母さん、どうして」
　月に向かって、吼えるように。どうせ聞いちゃいないんだ。